

**2018 年度 日本ホリスティック教育／ケア学会
第 2 回研究大会(自由学園)**

プログラム・要旨集

主催：日本ホリスティック教育／ケア学会

共催：学校法人 自由学園

2018年度 日本ホリスティック教育／ケア学会 第2回研究大会(自由学園)

主催：日本ホリスティック教育／ケア学会
共催：学校法人 自由学園

日 時： 2018年6月3日(日)

場 所： 学校法人 自由学園

参加費： 2,000円(大会当日受付にてお支払ください)

第2回研究大会 プログラム

9:00 開場・受付開始
9:30-11:55 口頭発表(学部棟2階 2A教室／2B教室)
11:55-12:15 ポスター発表
昼休み
13:00-13:20 定例総会
13:30-15:30 シンポジウム(記念講堂)
15:40-16:40 ラウンドテーブル(学部棟2階 2A／2B教室)

日本ホリスティック教育／ケア学会 第2回研究大会 タイムテーブル

	口頭発表 A会場(2A教室)	口頭発表 B会場(2B教室)
9:30-9:55	ヴァルネラビリティから教育を捉える —臨床教育学の視座から— 池田華子(天理大学)	「ホリスティックな援助者」モデルの試み 大山博幸(十文字学園女子大学)
9:55-10:20	おむつ交換時における保育士の価値変容 —保育士と乳児の応答関係に注目して— 神谷良恵(同朋大学)	仲間との学びによる科学認識の広がりにつ いての考察—保育を学ぶ学生達の科学認 識と共有化— 木村和孝(木実和教育研究部 東京福祉専門学校)
10:20-10:45	当事者の語り(回想録)を扱う調査研究 における当事者側への配慮の視点 平沢直樹(京都大学・院生)	フォルメン線描とマインドフルネス —脳波測定を通じたフォルメン線描の分析 山下恭平(東京理科大学・院生)、 井藤元・徳永英司(東京理科大学)
10:45-11:10	形成的アセスメント論におけるクライテリア の今日的意義 —「深いESD」の実現に向けて— 西塚孝平(東北大学・院生)、 有本昌弘(東北大学)	太極文化にみるホリスティックな生き方 —中国「天真園」の教育実践に着目して— 丸山貴彦(早稲田大学・院生)
11:10-11:35	学習の横断線 —ジル・ドゥルーズの全体性の思想— 松枝拓生(京都大学・院生)	つながりを生む「沈黙」—日舞とケアにおけ る<語りえぬもの>についての—考察— 坂東和治(彰栄保育福祉専門学校)、 坂東光有(獨協大学外国語教育研究所)
11:35-11:55	総合討議	総合討議

発表要旨

分科会 A 会場

司会: 今井重孝 (川口短期大学)、成田喜一郎 (自由学園)

<口頭①>

ヴァルネラビリティから教育を捉える—臨床教育学の視座から—

池田華子 (天理大学)

本発表は、ヴァルネラビリティ (vulnerability) から教育を捉えることの今日的な意義について、臨床教育学の視座から考察することを目的とするものである。

ヴァルネラビリティに対しては、弱さ、脆弱性、傷つきやすさなどの訳語が当てられることが一般的だが、語源にまで遡れば、この語は「傷つく能力を有していること」を意味している¹。このことが意味するのは、ヴァルネラブルであることが単に能力の欠如としてではなく、むしろ一つの能力として捉えられるものでありうるということである。

しかしながら、社会契約の主体となる自律した個人を前提としてきた近代教育思想の系譜においては、ヴァルネラビリティは専ら克服の対象として否定的に捉えられてきた。ヴァルネラブルであることは弱さや不完全さの表れであり、それは新たな能力の獲得によって、つまり、より強くなること、より完全なものに近づくことによって次第に乗り越えられるべきだと考えられたのである。

ただし、周知の通り、こうした「強い個人」を前提とする立場は批判の対象となつて久しい。これに対抗するオルタナティブな知のあり方が探究されてきた現代においては、ヴァルネラビリティを否定の対象としてだけ捉えるような論調はすでに力を失っているとも言えよう。「弱さの力」、「傷つく権利」、「弱く在ることの可能性」といった表現に見られるように、むしろこれを積極的に肯定することの可能性が探究されてきたのだと言って良い。

このような状況において、なぜ今改めてヴァルネラビリティの視点から教育を捉えなおす必要があるのだろうか。それはとりわけ 3. 11 という数字に象徴される出来事——すなわち、現代社会のあり方、そしてそのなかに生きる私たち人間存在のあり方がいかにヴァルネラブルなものであるかを象徴する出来事——以降、ヴァルネラビリティを肯定する立場は、非常に困難なものとなつたと言わざるをえないと考えるからである。傷つくことの肯定だけでは届かない、眼前に存在する深く傷ついた人たちの存在。ここにきて脚光を浴び始めたのが「レジリエンス (resilience)」であることも、ヴァルネラビリティをめぐる思想的状況の変化を端的に表している。単なる強さ (strength) を是とする時代は過ぎたが、弱さを肯定し、共苦 (compassion) することだけでは足りない。傷から回復する力、逆境から立ち直る力、苦しみを糧に成長する力としてのレジリエンスへと議論の中心は移っているように見える。

以上を踏まえた上で、本発表では、近年のレジリエンス概念をめぐる動向も踏まえながら、人間のヴァルネラビリティについて探究した思想家と見なすことのできる、フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユの思想を臨床教育学の立場から参照しつつ、ヴァルネラビリティの側から教育を捉えることの意義について検討したい。

1 この意味を重視した訳語に「可傷性」、「受傷性」などが挙げられるが、本発表ではカタカナの「ヴァルネラビリティ」という表記を採用した。

<口頭②>

おむつ交換時における保育士の価値変容

—保育士と乳児の応答関係に注目して—

神谷良恵（同朋大学）

近年「子どもの権利条約」に基づき、一人ひとりの子どもは、かけがえのない価値を持つ存在として「愛される権利」や「自分の思いや願いを自由に出し、それと向き合ってもらえる権利」（木附ら 2005）があるとされている。保育所保育指針（2017）には、保育の方法として「子どもの主体としての思いや願いを受け止めること」、「子どもの発達について理解し、一人ひとりの発達過程に応じて保育すること」の項目がある。これらからも、一人ひとりの子どもは、権利ある主体者であることが読み取れる。

上記の点に着目し、おむつ交換時における乳児の寝返りも、権利ある主体者としての乳児の思いの表われであることを、2016年度名古屋市立大学大学院人間文化研究科における修士論文「おむつ交換における乳児の寝返りに関する研究—E系列の時間に注目して—」において論証した。乳児はおむつ交換の途中で抱っこで起き上がりたい要求を保育士に受け入れられなかった時に、自分で起き上がるための手段として寝返っていたことが明らかになった。また、当時、保育士は時間の制限やおむつ交換する際の教育理念、保育方法などからくる心の焦りにより、十分に乳児の思いを受け止めることに至らなかった。こうした保育士と乳児のかみ合わない関係を振り返り、保育士があそびの時間に乳児の気持ちを受け止めようとした。結果として、乳児と「分かり合えた」と思える瞬間が訪れ、おむつ交換の時間においても良好な応答関係となっていた。この応答関係の背景には、保育士がおむつ交換において、どのようなことを大切にしているかという価値観の変容が関連していると推察できる。

そこで本研究では、保育士のおむつ交換における価値観の変容を明らかにすることを目的とする。まず、おむつ交換の時間が保育所においてどのような時間であり、そこでの保育士と乳児のかかわりについて概説する。次に、修論でとりあげた事例の乳児と保育士のおむつ交換の一場面の撮影記録を元に、当時の保育士のおむつ交換における価値観を見直すとともに、インタビューから価値観の変容を捉える。そして、「分かり合えた瞬間」の前後のかかわりにおける保育士と乳児の応答関係に着目し、保育士のおむつ交換における価値観が、保育士から乳児への応答および乳児から保育士への応答にどのような変化をもたらしたかについて考察する。

<口頭③>

当事者の語り（回想録）を扱う調査研究における当事者側への配慮の視点

平沢直樹（京都大学・院生）

障害者の権利に関する条約は、「障害者が、政策及び計画（障害者に直接関連する政策

及び計画を含む。)に係る意思決定の過程に積極的に関与する機会を有すべきであることを考慮し、」(前文(o))協定されたものである。

意思決定の過程への関与の仕方は多様である。その一つに、当事者の視点から問題提起をしたり、問題解決のための示唆を与えたりするという関与の仕方が挙げられる。当事者自身が実践する当事者研究はもとより、当事者の語り(回想録、書簡・メールのやり取り、インタビュー、講演など)を扱う調査研究に協力者として関与するという形もあるだろう。

本発表では、筆者が当事者の語り(回想録)を扱う調査研究(平沢, 2018)を行う中で直面した問題をピックアップし、協力者となる当事者側への配慮の視点など、今後の検討課題について報告する。

【主なトピック】

- 回想録において、当事者が障がいのカミングアウトする上での特別なニーズ
- 回想録を執筆する上でのフラッシュバックを未然に防ぐための仕掛けの存在
- 肉親への配慮を考えたとき、開示が限定的にならざるを得ないことの必然性
- 個性記述的方法による調査研究を行う上で求められる個人情報保護について
- 自己理解が進み自己肯定感が高まった当事者ならではの特別なニーズの存在

【参考文献】

平沢直樹(2018)障がいを持つパートナーとの家庭生活における関係性の発達と変遷—ある夫婦の家庭生活の回想から—。ホリスティック教育/ケア研究:(21), 29-48.

<口頭④>

形成的アセスメント論におけるクライテリアの今日的意義

—「深い ESD」の実現に向けて—

西塚孝平(東北大学・院生)、有本昌弘(東北大学)

本研究の目的は、形成的アセスメント(FA: Formative Assessment)の質の鍵を握るクライテリアの今日的意義を探究することを通して、「深い ESD (Education for Sustainable Development)」の実現に不可欠なホリスティック・アプローチの可能性を明らかにすることである。

FAは形成的フィードバックをその中核的機能に位置付けているために、国内でもフィードバック概念との関わりの中で論じられることが多い。しかし、フィードバックにより得られた学習の効果は、学習者がそのフィードバックの意味を理解していることを前提としている。また、フィードバックに基づき学習のギャップを閉じる行為、すなわち学習における進捗状況(学習者はどこにいるのか)と学習のゴール(学習者はどこに行くべきか)の間を埋めるためのアセスメントは教育者が主導となるため、学習者の主体性や学習に対する責任をもたせるうえでの障壁となっていることを見逃すことはできない。我々はFAのゴールが学習者の生涯にわたる主体的な学びとしての「学び方の学習(learning to learn)」の獲得であることに常に立ち返り、それを論ずる必要がある。

こうしたFAの概念化と並行してクライテリアに対する理解も変容しつつある。今日までの教育アセスメント論に、アカウントビリティを果たすためのスタンダードを重視するアプローチと個人の学習プロセスを重視するアプローチとの間で軋轢が生じているように、教育者により先決されたクライテリアと個人に紐づけられたクライテリアはうまく噛み合っていない。国内でも漸進するFAの機能研究の射程にはESDも含まれているが、永田が

「深い ESD」を妨げる要因の一つとして日本文化に根強いスタンダードや結果の重視を挙げたことは (Nagata,2017)、学習の質と進捗を高めるアセスメントの形成的機能が教室と学校の中でこれまで看過されてきたことを意味している。望まれるべきは双方を結合したアセスメントとクライテリアであり、複数の国内 ESD 実践から既にその萌芽を得つつある。

そこで本研究は、クライテリアの今日的意義を検討することを通して、質の高いクライテリアに準拠したアセスメントを行う際には学習者と組織に対するホリスティック (全体的) アプローチが欠かせないことを明らかにしたうえで、その達成が「深い ESD」を実現するための一つの切り口になることを結論づける。本研究は次の 3 部から構成される。まず、1)教育アセスメント論におけるクライテリアに対する理解をレビューし、閉塞的なクライテリアと開放的なクライテリアに分類を試みた後、2)熟達化研究と FA の動向を突き合わせ、クライテリアの今日的意義を整理する。以上を踏まえ、3)ESD 実践事例をもとに予備的考察を行い、ホリスティックな視点からのクライテリアの開発が「深い ESD」を誘発することを示唆する。

Nagata, Y. (2017). A Critical Review of Education for Sustainable Development (ESD) in Japan: Beyond the Practice of Pouring New Wine into Old Bottles. *Educational Studies in Japan*, 11: 29 – 41.

<口頭⑤>

学習の横断線—ジル・ドゥルーズの全体性の思想—

松枝拓生 (京都大学・院生)

本発表は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) の論じる「学習」apprendre 概念の射程を、彼の全体性の思想の観点から捉え直し、その教育的な意義を明らかにしようと試みるものである。

ドゥルーズは 1964 年初版の著作『プルーストとシーニュ』において、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の読解を通じ、ひとつの「学習」の過程を描き出している。そこで提示されているのは、世界はさまざまな「徴候」signes によって織りなされており、われわれの営む日常はそうした「徴候」の数々を「解釈」することとして理解される、という世界観である。そこにおいて、「学習」という行為は、「解釈」することによって「徴候」の「本質」を明るみに出すプロセスと結びつけて論じられる。

ここで興味深いのは、ドゥルーズが 1970 年代以降、「解釈」という行為に徹底して批判を向けるようになったという点である。「解釈するな」という彼のフレーズはなかば彼の代名詞として膾炙しているし、ときには「解釈症」という語彙を用いて、解釈にいそしむ態度を病理的な態度として描写している。このことは、『プルーストとシーニュ』における「解釈」への肯定的な言及と齟齬をきたすようにも見える。ドゥルーズは「解釈」という行為をめぐる立場を転換したのだろうか。

本発表はこうした問いを前に、『プルーストとシーニュ』における「解釈」の含意および、「解釈症」という批判的な言及における含意をそれぞれ検討する。これらの検討を通じて明らかになるのは、「解釈」をめぐる二つの立場が、実は共通した問題関心、すなわち彼の全体性の思想のもとに整理されうるということである。彼が「横断線」transversales という概念によって提示する全体性の思想は、諸々の部分を有機的に組織化し全体化することのないような形であられる全体のあり方を論じるものである。そうした全体は既存の固定的な枠組みとして君臨することなく、諸々の断片的に獲得された経験がその特異性を保持したまま存在し続けることを肯定する。

本発表では、最終的に、『プルーストとシーニュ』において論じられる「学習」の様相を、このような全体性の思想との関連のもとで捉え直すことになる。既存の固定的な枠組みのなかで知識を蓄積するという学習のイメージとは異なり、絶えず枠組みそのものが、あるいは世界観そのものが組み替えられてゆく経験のあり方を示唆するものとして、ドゥルーズの「学習」観の意義を明らかにする。

分科会B会場

司会：中川吉晴（同志社大学）、金田卓也（大妻女子大学）

<口頭⑥>

「ホリスティックな援助者」モデルの試み

大山博幸（十文字学園女子大学）

筆者は、広く福祉領域に従事する援助者において、福祉社会の実現遂行の役割・機能を担う「機能人」としての側面の対極あるいは背景に、人間的側面を強調するべく、「ふくしびと」という概念を提案した（大山、2014）。「機能人-ふくしびと」を存在様式のスペクトルとしてみたとき、当該援助者は意識するしないにかかわらず、この存在様式を重層的に生きている。

「ふくしびと」としての人間的側面を加えて、援助者をとらえたとき、援助者は、ホリスティックな（全人的）存在として浮上する。「機能人」としての援助者は、例えばアセスメントやプランニングの過程において、クライアントや対象地域および活用する諸社会資源に対して俯瞰的な立脚点をとっており、自身の存在は暗黙に隠れてしまう。それはクライアントや地域の問題状況を客観的に対象化して把握し介入する際には有益なポジションであるが、クライアントとの援助関係自体から生じる困難さ（転移・逆転移な状況）に対処する際や、地域住民が抱える生活問題を実感して理解しようとする際においては、その身に起きている内的な過程を意識せざるを得なくなる。「機能人-ふくしびと」の存在様式を内に含む「ホリスティックな援助者」は、クライアントとの援助関係や地域づくりのための活動の裏にその身を隠すことなく、自身の人間としての姿や行為をしっかりと現すこととなる。今日、「機能人」としての援助者が主流を占めている点で、上記「ふくしびと」を提案する筆者の立場からは、「ホリスティックな援助者」は目指すべきモデルであり、動的な福祉実践の中で、援助者を発見する過程（旅）と言える。

このような目指すべき「ホリスティックな援助者」は、自己覚知を経由する学習によって導かれると考える。筆者は福祉領域の援助者に求められる自己覚知に基づいた学習の領域・方向として、①「ケアする人としての共感」②「自己概念の変容」③「専門性の意識化」④「共生への志向」の4つを示した（大山、2012）。これら4つの学習領域・方向は、「ホリスティックな援助者」を構成する諸次元に対応・関連しているものと考えられる。

また「ふくしびと」を含む「ホリスティックな援助者」は専門家、非専門家といった区分や資格・職権の有無を問わず、「生の困難さ」をもつクライアントとともに生きることを意志する「ケアする人」一般をも含むものとする。それは援助することやケアすることの人間的側面を強調すれば、必然的なことでもある。このことは、厚労行政で今日的課題としてうたわれる、「地域包括ケア」や「我が事・丸ごとの地域づくり」、「地域共生社会モデル」において、地域住民がケアの主体的な担い手として期待されてきていること（社会福

祉法第4条2項（平成30年改正）に対しての、批判的言及が可能となると考える。

本研究は、援助者の存在様式である「ふくしびと」概念に言及したうえで、「ホリスティックな援助者」モデルを、多層な自己覚知の学びの次元に基づいて提示することを試みる。また、今日的課題となっている「地域包括ケアシステム」の構築や「地域共生社会」の実現について、批判的に言及する。

この援助者モデルによって、福祉領域における「援助の現実」がよりあらわに語られ、援助者はその「援助の現実」をより十分に生きていく契機を得ることができると考える。

<口頭⑦>

仲間との学びによる科学認識の広がりについての考察

—保育を学ぶ学生達の科学認識と共有化—

木村和孝（東京医療秘書福祉専門学校 木実和教育研究部）

1. 背景

保育を学ぶ学生達は理系の教科が苦手と考えられることがある。実際に、学生に話を聞いてみると、理科は嫌いであったなどと答える学生も少なくない。一方で、保育の世界に目を向けてみると、小さな子ども達が見る世界は自然にとどまらず日常そのものが科学であり、子どもの世界観を広げる保育士が、科学的な価値観を何らかの形で持ったり、共有することはとても大切なことではないかと考えている。

もう少し学生の理科嫌いに触れてみたい。学生との理科の話題について聞いてみると、小学生の頃は好きであったなどと言う学生も見受けられるように感じる。理科という学習が進むにつれてより専門性が高まり、いつの間にか、理科＝難しいものという認識にとらわれてしまっているのではないかと考えている。

本実践においては、以上を考慮して二つの視点に注目し授業実践並びに検討を行った。一つ目は、そもそもの科学認識に対する素朴な概念がどうなっているかという点。そしてもう一点は、個々の持っている概念を仲間と共有することによって自信を持って表現することに結びつかないかということである。幼児期の子どもたちに対して、最も影響を与える保育士になろうとする学生達の科学的思考を一つのテーマとして、本実践にあたった。

2. 実践概要

実施時期：平成30年2月

対象：専門学校保育養成課程 学生

テーマ：空気の膨らみ方

内容：ビニルボールを用意し、膨らませたものを温めたり冷やしたりすることをみせ、又実際に自分達でもやってみながら、どうしてそのようなことが起こるのか、個人で考え、その考えを持ち寄ってグループで話し合った。

3. 結果

個人で考えているとどうしてもそこに自信がなかったり、理科に対する先入観等で、考えが広がりにくいと感じる学生が多かった。一方で、グループを組んで話し合ってみると、難しさよりも現象の面白さや、これでもいいんだというような肯定感も共有しあい、豊かな発想による科学認識の説明が増えた。

また、グループによる回答については、小学生に見られるような比喩的な表現を多用し、そこには科学認識の理解としては十分なほど豊かな発想を見ることが出来た。

4. 今後の課題

本実践において気づきたいいくつかの視点について整理する。まず一つは、自分の考えに対しての自信の有り無しに対しての差があること。自信が有るから正しいとか、その逆で無いから正しくないということではなく、この潜在的意識を顕在化し、授業理解の方法の一つとして活用することが大切であると考えられる。また、昨今の教育の話題の中で、アクティブラーニングについて推進されているが、一人一人がいかに関心する学習に向かうために、集団で行う学習の中でも、考え・表現する機会を与え、自身の気持ちを高めるきっかけを作るかという視点が改めて大切であると認識した。そして、科学の認識に向けては、保育に向かう学生に対して、その思考力は十分であり、理科＝苦手・嫌いというものではなく、表現の多様性ということにも気づいてもらえる工夫がなされると、保育の中にも科学概念の萌芽が生まれやすくなるのではないかと考えられる。

5. 参考文献

ジョンソン, D.W. ジョンソン,R.T./ホルベック,E.J.著 石田裕久 梅原巳代子訳:「学習の輪」 2010 二瓶社

<口頭⑧>

フォルメン線描とマインドフルネス—脳波測定を通じたフォルメン線描の分析

山下恭平（東京理科大学・院生）、井藤元（東京理科大学）、徳永英司（東京理科大学）

本報告は、シュタイナー教育独自の実践であるフォルメン（Formenzeichnen）の意義を線描実践者の脳波測定によって明らかにすることを目指すものである。「フォルメン線描」は、名詞フォルム（Form）の複数形と、動詞 zeichnen（線で描く／素描する）が組み合わさったものであり、しばしば略して「フォルメン」と呼ばれる。シュタイナー学校においてフォルメンは、通常1年生から5年生まで行われ（シュタイナーの発達論に従えば第2・7年期に相当）、年に2、3回、2、3週間にわたって実施される。

既に拙稿（井藤元「フォルメン線描における自然認識と芸術的創造—シュタイナー教育の道徳的基盤」『ホリスティック教育研究』第20号、2017年）において、シュタイナーが依拠したゲーテ的自然認識の意味を掘り起こす中で、フォルメン線描がシュタイナー教育において子どもの道徳的基盤の形成にとって極めて重要であることを示したが、本報告では、フォルメン線描の意義を線描実践時の脳波測定をつうじて明らかにしたい。本報告では最終的に、フォルメン線描を真に体験できている状態が、マインドフルネスを実践している状況と類似していることを示す。

さて、本報告で測定結果を示すのは、脳波のうち、 α 波、 β 波、 δ 波である。各脳波の一般的な特徴として、 α 波は安静時（集中時も含む）や、閉眼時に高くなることが知られている。また、 β 波は積極的に論理的思考活動をしているとき、 δ 波は深い睡眠時に高くなることが知られている。

本実験では、すでに脳波研究分野で実績のある脳波計 MUSE を使用した。その結果、線描と瞑想時では共に α 波が通常時より増加したため、リラックスした状態で集中していることが示唆された。また、瞑想時は δ 波に対して β 波が低い、もしくは同じレベルであるが、線描時では途中から逆転する現象が観測された。特に図1の線描スケッチ「X」の位置における脳波は、グラフ(a)の β 波の増加が終わり、定常状態に入る地点に対応していた。終盤においては、中心に近づくに従って β 波はさらに増加した。これは、外側の曲線

に合わせて内側に向かって描いていくときの方が、より論理的な思考活動を要することを示唆している。他にも、既に教育現場で実践されている、線描前に心を落ち着かせることの重要性を裏付ける結果や、線描の色と脳波に関する知見が得られた。

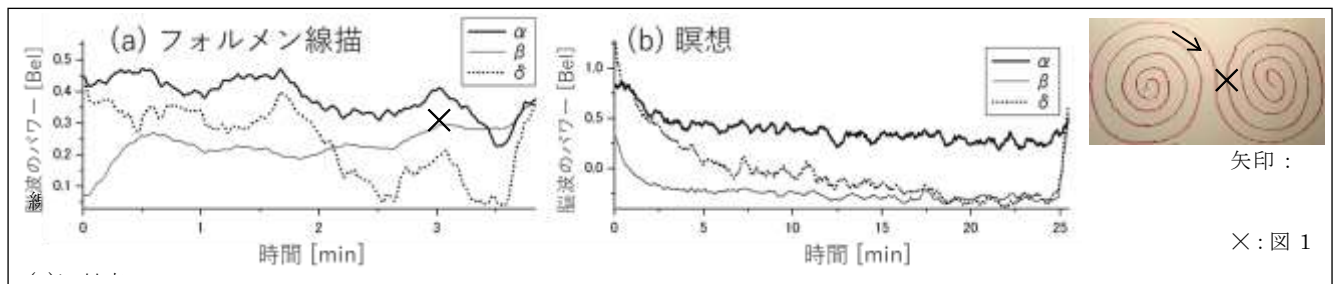


図 1. 脳波のグラフ、及びフォルメン線描のスケッチ

<口頭⑨>

太極文化にみるホリスティックな生き方

—中国「天真園」の教育実践に着目して—

丸山貴彦（早稲田大学大学院）

1. はじめに

本発表は、中国の「天真園」という教育施設の実践に着目し、そこで傳承されている太極文化の基本原則と教育方法について考察することが目的である。

2. 天真園と太極文化

天真園とは、北京と天津のちょうど中間にあたる天津市武清区城関鎮という町に位置し、太極文化の傳承ならびに教育を目的として 2000 年に創設された教育施設である。当園の中心活動は、「天真國際書院」という学校における太極文化を通じた全人教育であり、天真園の創設者である邢起林とその夫人の崔愛玲がそれぞれ校長と副校長を務め、教育実践を展開している。対象年齢は 3 歳から 30 歳で、2018 年 3 月の新学期始業の時点では 3 歳から 18 歳までの約 40 人の生徒が在籍し、共同生活を送りながら日々の学習と修行に励んでいるが、園内では学校の他にも有機農業や文化保育などの事業が展開されているため、セミナー等を通して幅広い世代の人が来訪し、太極文化について学んでいる。天真園で傳承されている太極文化とは、宇宙万物の規律（＝太極）に則した営みの全体を指している。つまり、人間はどのように誕生したのか、天地人宇宙はどのような関係にあるのか等の、宇宙天地人類の生成や変遷に関する規律に基づいた智慧と実践の集積であり、それらを通して「天人合一」の体現、ならびに究極的な「和（調和）」の実現を志向する生き方のことである。天真園ではそうした太極文化の傳承と教育を通じて、一人ひとりが「本当の我」、すなわち「天真（本性）」に回帰することを目指している。

3. 太極文化の基本原則と独自の教育方法

太極文化の核心は太極図にあり、そこから宇宙万事の運動、すなわち生成や変化の規律を見出し、それを基盤として現実生活を営んでいく。そのための具体的な方法には様々な段階や内容が存在するが、「天真園」では主に「行住坐臥」の養成、すなわち挨拶や清掃な

どを基本とする日常生活の正しい習慣養成と、「文・武・医・農・芸」という五つに代表される項目を教育している。特に後者は古代の聖人や聖賢から伝わる重要な教えが凝縮されており、人と人、人と自然、人と天との関係を学び、生命の質を高めるために必須な内容であると考えられている。また、すべての学習において、身体を整え、心を正し、体内のツボを開くことが必ず強調され、こうした修練の積み重ねにより上記の目的達成を目指していく。

4. おわりに

数多の文化論が世に出ているが、太極文化に関する学術的な研究は皆無に等しく、その内容や伝承方法に関する具体的なことはほとんど知られていない。「天真園」の教育実践に着目することで、太極文化の様相が明らかになるとともに、ホリスティックな生き方を問うための新たな視座が得られると期待できる。今後はさらに具体的な内容や実践に焦点化し、研究を進めていくことが課題である。

<口頭⑩>

つながりを生む「沈黙」

一日舞とケアにおける<語りえぬもの>についての一考察—

坂東和治（彰栄保育福祉専門学校）、坂東光有（獨協大学外国語教育研究所）

ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』（1922）の結語で「語りえぬものについては、沈黙しなければならない。」と述べているが、中村直行は『沈黙と無言の哲学』（2015）においてこの一文のさらなる解釈を試み、ウィトゲンシュタインが伝えようとしている内容を次のように言い換えている。「<超越的なもの>に触れたことのある者よ、それについて語りたくなる衝動に堪え、その誘惑に抗すべし」。

本発表では、日本舞踊における<言葉では語りえぬもの>を研究対象とし、踊り手の「心の動き」と「沈黙」について考察する。まず、言語学者ソシュールが提唱した「聴覚映像 *une image acoustique*（イマージュ・アコースティック）」という語を手掛かりとし、邦楽の世界観を体現する際に、踊り手がここで感じているもの、からだの記憶（振付）の頼りにしているものについて考えていく。そして、<語りえぬもの>として常に踊り手の身体に寄り添っている「心の動き」が、「沈黙」の共有を通してどのように人から人へ伝播してゆくのかを探っていくことが本研究の目的である。

研究発表は、実演を主軸として行い、詳しい論拠については配付資料で補足する。

「型」にはまり「沈黙」する踊り手の姿勢と、他者をケアする姿勢には、いくつかの身体的（首の傾き、手の位置、視線の交わり方など）、精神的（『ケアの本質』（1971）における「忍耐」の概念など）な共通点があるように思われるため、その点についても実演を交えて考察したい。正しい意味づけを行わなければ、「沈黙」は何も伝えることがなく、ただ相手を不安にさせる要素にもなりかねない。しかしながら、コミュニケーションやケアにおいて、<超越的なもの>に触れているからこそ<語りえない>のだということを互いが了承した上で「沈黙」するならば、そこには、ホリスティックなつながりが生じるのではないかと思われる。

一日舞とケアにおける<語りえぬもの>については、本発表での一考察を出発点として、医療・福祉の現場で実践し、今後さらに研究を深めていきたい。

<ポスター①>

「ハートチャレンジ」で見たこと—子どもたちの気づき—

原田香世（社会福祉法人豊野保育園）

1. はじめに

2017年度より年長児クラスを担当することとなり、予てより懸案だった子ども同士の他者へのマイナス面の指摘が多いことへの改善と同時にプラス面への気づきの少なさに対して何らかの実際的な変革を視覚的要素を踏まえ起こすことが出来ないか考えた。

心に対する保育の実践、研究は弊園では意欲的に取り組んでおり、日々の保育と共に重要課題と認識しているため、この年長児クラスの担当を機会に可視化、形状化し「ハートチャレンジ」と名付け実践してみた。

弊園は、昭和24年に財団法人として設立されてその後、昭和60年代から「一人一人の子どもの人格を尊重し円満な人格形成」を促すべくコダーイ芸術教育の理念を元に保育に取り組んできた。以後30年来様々な社会環境の変化が生じてきた中で時代の変遷に応じた保育を行ってきた。そこで従来よりのコダーイ芸術教育の取り組み、さらに近年より多角的な取り組みをすべく、包括的かつ全体的であるホリスティックな保育への取り組みの実践を試みている。

2. 実践の有り方

この度のハートチャレンジを実践するにあたり注意した要素は、視覚的には子どもはもちろん、お迎えに来る保護者の方々にも短時間でわかりやすいものにしたこと。明るく、「ハートチャレンジ」の名の要素を形状化したものにしたこと。子ども達同士では、互いにどう思い合っているか伝わるよう発表の場を作り、表現するようにしたことである。特に表現ということでは、最近人前で一人で立って何かを言う機会自体がないので、あえて機会を設けた。

手順①毎週2、3回友だちにしてもらって嬉しかったこと、友達のいいところ、を見つけて各クラスで発表する。

手順②クラス全体でその意見に共感したり、褒め合う（拍手）、また話し合う。

手順③保育士は、それをハートマークに切り取った紙に書き、専用のボードに貼る。（発表した子の名前を記入）

手順④月に一回の園便り「とよのキッズ」にその月の子どもの心の変化や様子と併せて、発表された意見を掲載する。

3. ハートチャレンジ実践例

エピソード4、5月：5歳児S君

年長児K君がお茶をこぼしたので、雑巾で拭いてあげたら「ありがとう」と言ってくれて嬉しかった。

→年中児は、お茶のキーパーの使い方が上手い出来ないことも多く、気にかけて見ていた年長児S君がこぼしてしまった子の始末をよくしてくれたが、お礼を言われて嬉しさを感じた。

エピソード9月～11月：Yちゃん

運動会のリレーで自分は負けたけど、あお組が勝って嬉しかった。

→少し弱気な面、控え目なところがある年長児Yちゃんだが、自分だけでなく、友達と一緒に頑張ることを意識し始め、発言できた。

エピソード12月～3月：Nちゃん

年中児Sちゃんが泣いていて、年長児Mちゃんが優しく声をかけていたのを見て、自分もそんな風になりたいと思った。

→同じ年長児が優しく声をかける姿を見て真似をしたい気持ちが持てるようになった。優しい年長児の女子は模倣の連鎖を生む姿が見受けられる。

4. 考察

一年を通してハートチャレンジを行って行く中で、子ども達だけでなく、保護者の方々にもハートチャレンジが浸透し、親子の会話にもハートチャレンジという言葉が見受けられるようになった。保育士からの声掛け、家族からの応援などのアプローチを受けることにより子ども達の心は変化し成長していった。関わりの中で、交流の中で自分の心の変化に気づく子ども達もいる。

友だちを批判的な言葉だけで見ようとしていた当初から友だちを肯定的に見ようとし、それを言葉にして表現し、それを喜んでくれる友だちを見て自分も嬉しいという好循環がハートチャレンジボードによって可視化できたように思う。

また、この度は皆の前で発表の場を設けるということにもこだわったが、日常の些細な友達との関わりを振り返り、思い出しながら自分なりの言葉で発表し、それが相手に伝わり嬉しそうな顔になったのを見て更に嬉しくなり、人に褒めてもらえ、それを見た友だちが真似て自分もしようとする正の連鎖が生まれた。

<シンポジウム>

今ここからホリスティック教育/ケアの可能性を探る

シンポジスト：河野 桃子（信州大学）

曾我 幸代（名古屋市立大学）

高橋 和也（自由学園）

吉田 敦彦（大阪府立大学）

モデレーター：成田喜一郎（自由学園）

なぜ、今ここでホリスティック教育/ケアの可能性を探るのか、それも4人の登壇者を迎えて。

わが国の「ホリスティック教育」は、1990年代に小さな産声を上げました。

教育者・研究者・生活者らバックグラウンドの多様な市民たちが集い、日本ホリスティック教育協会を立ち上げた1997年から20年が過ぎました。昨年、成人式を迎えた「ホリスティック教育」は、日本ホリスティック教育/ケア学会を立ち上げました。環境・経済・社会、そして個人の持続可能性と不可能性がせめぎ合う時代状況のなかで、今あらためて私たちは、あらゆるひと・もの・こととの繋がりと釣り合い、そして、それらを包み込み続く／続ける学びの意味とは何か、そしてこの時代状況が強く求めてやまない「ケア」の根源とはいったい何か、世代を超えて探求し始めたのです。

他方で、この「ホリスティック教育」や「ケア」は、深く永きにわたる内外の歴史の中で地下水脈として流れて続けてきたと言ってよいでしょう。たとえば、今年の会場校となった自由学園やシンポジウムでも取り上げるシュタイナー学校は、もうすぐ創設100年を

迎えようとしています。さらには、近代の制度化された学校や病院などが誕生する遙か以前より、ホリスティックな教育やケアの叡智は、日々の生活のなかに息づいていたとも言えます。世代から世代へ受け継がれ守られるべき「伝統知」と、時代に即応して更新されるべき「現在知」。誰しも予測不可能だという次の20年に向けて、両者の葛藤にどのような見通しを得ることができるでしょう。

そこで、本シンポジウムでは、異なる世代の教育者市民・研究者市民4名の方々を迎え、わたくしたちはなぜ「ホリスティック教育」や「ケア」とつながってきたのか、これからどこへ向かおうとしているのか、正解のない問い、深くて永く続く問いへの応答をし始めたいと思います。

さあ、教育やケアに繋がり関わるすべてのみなさん、今ここから、共に問いへの応答をし始めてみませんか。

<ラウンドテーブル①>

乳幼児保育と ESD：一斉からの脱却へ

企画・司会者：曾我幸代（名古屋市立大学）

提案者：神谷良恵（同朋大学）

ESDの普及と促進がなされた「国連 ESD の 10 年」（2005-2014 年）が終わり、ESDの深化が問われる次のステージにおいて、「子どもの権利条約」が重要課題の一つとしてあげられた。世界的にも社会的弱者と認識される「子ども」の権利を保障することが持続可能な開発の実施方法の一つとして再確認されたのである。

しかしながら、少子高齢社会において乳幼児保育をとりまく社会状況は決して持続可能とは言いがたい。都市部では近年待機児童数の増加が問題視されていることに顕著のように、保育園への入園希望者は増えているが、保育士は不足している。保育者一人に対する園児の数も見直しがなされないままであることも事態を深刻化している。また、子どもの声が「騒音」とされて保育園建設に反対があったり、保育者の労働条件が悪かったり、子どもが被害者となったりすることがしばしば報告される。

「子どもの権利条約」にあるように、保育園は子ども一人ひとりの発達と成長を促しながら、日々の生活を保障する場所として、また親が安心して子どもを預け、子どもが心地よく過ごせる場所としてあることが望まれる。けれども実態は一人ひとりのみというよりも、集団として対応する傾向が強いのではないだろうか。トイレ、食事、午睡、遊びなど、一人ひとりの子どもを主体者として捉えるということが理想として認識され、実際は保育を「こなす」毎日を過ごしているのではないだろうか。理想に現実を近づけるために、保育者らはどうしたらよいのか、困っていることもしばしばある。

「子どもの権利条約」に基づく「子ども中心の保育」や「一人ひとりが大切にされる保育」という考え方は保育において当然視されるが、子どもをとりまく状況が持続可能とは言いがたい昨今、他者との関わりを見直すケアの視点から改めてそれらが意味する保育のあり様を検討する必要がある。保育者主導のもとで一斉保育されることが本当に子ども一人ひとりの「人格の完全なかつ調和のとれた発達」につながるのか、また「幸福、愛情及び理解のある雰囲気」であるのかを批判的に問うてみたい。

本ラウンドテーブルでは、事例をもとに一斉保育から変わっていくプロセスに保育者自身にどのような変化が見られるのかについて捉えていきながら、子どもの権利条約に基づいた保育環境とはどのような場であるのかを考えていきたい。

<ラウンドテーブル②>

つながりのスキル「コネクションプラクティス」の教育における実践

野沢綾子（神戸親和女子大学大学院・非常勤講師）

コネクション・プラクティス（CP）は、非暴力コミュニケーションの共感を通じて自分と、相手とつながり、「関係性・感情の知性」を育み、心臓・脳の調和により、課題の創造的解決をもたらすスキルとしてコスタリカの小学校や国連平和大学などで導入され、校内暴力・いじめの減少、成績向上が報告されてきた。アメリカに続き、2015年には日本に紹介され、現在教育、カウンセリング、コーチング、ビジネス、医療・看護などの様々な分野に広がりつつある。

教育分野では、千葉県柏市の教員研修（2016年、2017年）、熊本の大学の子育て研究センター（2018年）、広島市の公立中学校の授業（2016年）などでも、CPが取り入れられ、新英語研究会中四国ブロック研究集会でも導入の様子が伝えられた。また2017年、2018年、神戸親和女子大学大学院のホリスティック教育特論の講座の一環としてCPが教えられている。

昨年一年間は、広島市中心のべ90名（他ラースールとの共同開催含む）、国内外（アジア、北米、中東、北アフリカ）の教育者190人に、コース開催や、国内外のホリスティック教育学会での発表などを通じて、コネクションプラクティスを伝えた。昨今特別支援教育者やホリスティック医療関係者からの問い合わせが増えている。

広島でのCP受講者で平和教育地球キャンペーン中四国支部事務局の教育者は「様々な平和教育の手法を学んできたが、コネプラが一番有効」と述べた。これまで、戦争の悲惨さ、被爆地としての悲劇、それを繰り返さないための想いの確認などが主だった平和教育も、受け取る子どもによっては、重さや苦しみを感じていっぱいいっぱいな場合もあり、そんな場合でも、日常に起こるささいなケンカや暴力をいかに解決するか、感情とニーズを知り、つながりを取り戻す、その手法としてCPを学ぶことが平和を「築く」とアプローチとして、平和教育の礎になると言う。

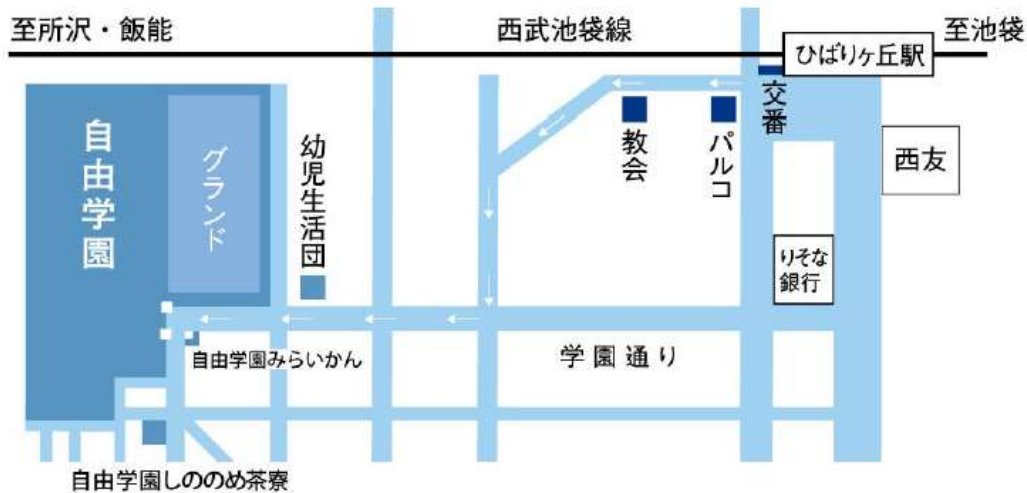
これまで国内外で、様々な国籍の方たちにコネプラを伝えてきた中で、複雑な背景があって、何年もセラピーやカウンセリングに通っていた方が、CPを使って解決の糸口を見つけた例も見た。今回の発表では、主に個々のケースを通じた実践について主に紹介し、簡単なワークの体験も行う。

アクセス

ひばりヶ丘までの電車・バス路線図

●池袋より15分

急行が停車する「ひばりヶ丘」は、西武バスのアクセスや副都心線の乗り入れなどが大変便利な駅です。





参加申込

学会事務局 (jimu@holistic-edu-care.org) 宛に、①氏名、②所属、③住所、④E-mail アドレスをお知らせください。

参加申し込み期限 2018年5月31日(木)

(※いただきました個人情報につきましては、大会の運営目的以外には使用いたしません)

お問い合わせ：

大会に関するご質問等、お問い合わせは下記の E-mail までお願いいたします。また、大会情報に関して変更が生じた場合は、ブログにて随時更新いたしますので、大会までこまめにチェック願えますようご協力をお願いいたします。

学会事務局

E-mail アドレス：jimu@holistic-edu-care.org

大会ブログ：<https://taikai-holistic-edu-care.blogspot.jp/>